

看護師の広島被爆体験記

被爆と私の人生 日赤第 106 救護班勤務当時の思い出

今村 サヲ

昭和 17 年 5 月 7 日、日赤兵庫支部に召集、第 106 救護班に編入、同年 5 月 7 日神戸出発、5 月 8 日広島陸軍病院本院十号棟配属勤務、第 2 分院三滝分院病院船衛生班転属。昭和 21 年 8 月 31 日国立大久保病院転属、同日付召集解除。引き続き国立大久保病院、大日本紡績貝塚工場付属病院国立療養所、国立京都療養所、堺市立病院看護部長を無事に終え、引き続き好きでなった此の道一筋に生きて参りました。

広島陸軍病院本院は急性伝染病チフス、パラチフス、赤痢等の看護も大変でした。腸チフスの高熱患者の氷のう氷枕の氷交換の時、冬は水道の水で手をあたためていた。氷よりも水道の水があたたかいから。今は冷蔵庫の中に小さな氷を作る所がありますが昔はキリでくるみ大に氷を割って手ですくって氷のう、氷枕の交換をしていました。ずっと本院勤務でしたら今頃皆様方にお話する事は出来ません。市の中心部にありました肺結核患者の看護三大法則、大気安静栄養の法則に従っての療養ですが、青壮年に多く罹患する病気で一度この病気に罹患すると殆どの方が亡くなられる不治の病気とされていました。空襲燈火管制のもと、うす暗い燈火の中での看病は大変でした。

本院勤務時代はまだ勝った勝ったの戦況でしたが、三滝病院時代になりますと空襲頻繁で発令解除の繰り返しで服装も白い服を染料がないので草の青汁で染めて紋章のまま宿舎でも着替える事なく何時でも飛び出して病院に向けて走れるよう、夜もろくに眠れない毎日でした。

食料事情も大変でサツマイモのクキ、大豆粕「肥料」のおかゆさん。それでも食べられたら幸せです。そうしている中に愈々運命の日、8月6日がやって参りました。

その日はとってもいい天気でした。朝から雲一つない日本晴れ、朝の太陽が照りつける午前8時から庭に出て、ラジオ体操が終って詰所の敷居を一步またいだ瞬間、8



時15分原子爆弾が広島市の中心に投下。その時まだ原子爆弾とは分かっておりません。ピカッ！！と光ってドーン！！と音がした様な気がしました。と同時にまともにも顔面に被爆、同時に吹き飛ばされ、気がついた時は、がれきの下。帽子は一病棟先へ飛んで地下足袋も片方が吹き飛んでありません。体の



被爆から3日後の広島第二陸軍病院三滝分院
撮影：川原四儀 広島平和記念資料館提供

全体にガラス破片、材木の破片が刺さって血が流れている。焼夷弾とあっておりましたので足の方から焼けてくるか或いは右の横腹の方から等、考えている時間がありまして「あ～ここで自分は死んで行くのだな。あ～と、その時母親の顔がふ～と浮かんで参りました。

あ～こうしてはいけない、患者さん！！と、ガラス破片や木片の上を裸足で個室を見に行きましたが、個室は柱が多くて天井は吹き飛んでいました。患者さんは外に出ておられました。重症でも結核だから自分の足で歩けるので、三滝分院は講堂だけが焼失しました。

あんなに良い天気が爆弾投下と共に一転俄かにかき曇り大雨となり、叩きつける様な黒い大雨が。全身ビショ濡れになって患者さんを三滝の山の防空壕に収容しました。防空壕までは病院から田んぼ道を通りぬけて行った所ですので一人ひとり運び、自分の事などすっかり忘れて収容が終わったのは夏の長い日も暮れようとしていた頃かと思います。

しばらく私は気が抜けたようになり我にかえった時、顔の痛みと全身打撲、背部手足の傷口が痛み、まるでお岩みたいだったとあとで皆に言われました。受傷した時顔面がまるで硫酸でもかけられた様にピリピリ痛み、夕方になると顔面の皮膚は真っ黒、唇は腫れて握りご飯の飯粒が口の中に入らず、上唇を指でつまみ開けて食べ、あとで今村は駄目だ、可愛そうにと皆さんから聞きました。受傷後10日間、山の中の生活。15日まで雨が降らなかったからよかった。

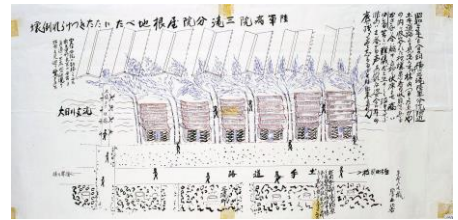
患者さんの大小便の世話看護、それでも戦争に勝つ迄はと、皆一生懸命頑張りました。夜になると市内は死体を焼く火が毎日毎夜と続きました。顔全体チンク油を塗り真っ白な顔をして患者さんの看護。反対に患者さんから慰めて下さいました。焼夷弾のあとは残らないからと、二目と見られない顔をしていると、長い間鏡を見るのがこわかったのです。夜になると創がズキズキと痛み、朝になるとカサブタの下から膿が出て地獄の様な一夜が明け又天気の良い朝が来て、田んぼの稲の葉が全体に黄色く枯れるのでなく薬液をかけた様に点状に、点々と粒状に枯れているようでありましたので私はその時、焼夷弾とは違うな～と思いました。

それから数日して、原子爆弾で広島は70年草木も生えぬと、流言飛語が飛び交いました。私の母も気が狂ったみたいに私を探しに行きたいが、行ったら死んでしまうと言われて思いとどまった様です。私が田舎へ帰った時話してくれました。田んぼの中に気が変になって立って、何やら叫んでいる人、黒こげになった母親の乳房にすがって泣いている子供、殺してくれ、助けてくれと言っている人。炎天下全身火傷になった人達が軍病院に行ったら治療してもらえるだろうと、息も絶え絶えに病院に向けて来た人達が田んぼの畦道、田んぼの中に入るとして、その様子は正に生き地獄の感あり息のある人は名前を聞き、紙キレに名前住所を書いて体につけておくと探しに来られた方が分り易い様に出来る限りの事はしましたが、その当時の事は筆舌につくしがたいものがあります。

8月6日から15日迄雨が降らなかったから助かりました。夜は懐中電灯で患者さんの状態を見、8月15日朝、今日12時に重大な放送があると言う事を聞きながら、先発隊で患者さんを高田郡井原市小学校へ疎開10日間の山の生活に終わりを告げ疎開途中の駅で消防団の方に今日の重大放送は何でしたかと聞きましたら、天皇陛下の玉音放送で負けましたと聞きました。

反射的にそうですか！！ 日本が負けるとは思ってもおりませんでしたので自分の耳を疑いました。

目的地に着くまで一切、口外しませんでした。



三滝分院で竹藪の蚊帳の中に収容された無数の被爆者
画：藤森長市 広島平和記念資料館所蔵



三滝分院では重油で死人を焼いた
画：高宮ヨシノ 広島平和記念資料館所蔵